

私が保育者になって四十年、教育や社会のありようも、保育制度も、大きく変わったように感じています。福祉予算はどんどん削られるのに、多様な保育を、待機児童解消を、地域の子育て支援もと、求められるものばかり増えていく、というのが現場の実感です。そして、保育の世界で「サービス」という言い回しが多用されるようになりました。保護者は「ともに育つ仲間」から「利用者サマ」になってしまったのでしょうか？

幼い子を育てながら「わが家」の生活基盤を築きはじめる若い家庭にとって、保育園はまさに社会の窓口であり、幸せに生きるために存在する福祉の砦です。最初はそのつもりはなくても、登園がはじまれば否応なく、いろんなタイプの保育者や保護者、子どもたちと交流し、子育てや生活の知恵、さまざまな文化や価値観とふれあうことになります。ときにはのっぴきならないピンチや感情が波立つ行き違いも経験しながら、助け助けられ、社会の営みとしての子育てというものを実体験するうちに、孤独な子育てを回避し、自己責任の呪縛から少しづつ解かれていく保護者を数多く見てきました。

この大原則は変わらないけれど、どんな時代にも、その時代時代に合った保育の役割があると私は思っています。時代が変われば、子どもたちの豊かな育ちと保護者の幸せに生きる権利を保障するために、何をすることが最善かも変わってくるからです。

しかし、この間の制度改革の進む先に「時代に求められた保育の形」があるとは到底思えません。とりわけ二〇一五年にはじまった子ども・子育て支援新制度前後からは、公的保育制度は次々に転換を迫られ、「だって待機児童がいるからしかたがないでしょう？」と市場化が促進され、保育所と幼稚園のほかに多様な保育施設が創設されて、子どもたちには1号2号3号と番号が振られました。規制はどんどん緩和され、同じ国に生まれたのに、地域によって、預けられた施設形態によって、園庭も保育者の資格の有無も、給食の温かさも、受けられる保育にこんなにも差がつく形になってしまいました。そのうえこの国の保育は、子どもたちの一人ひとりの育ちでさえも、国が決めた「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に閉じ込めようとしているかのようです。いったい誰のための保育なのでしょう？

その一方で、七十余年もの間低い水準に据え置かれた職員配置基準と、未だに性別役割分業の認識から抜け出せずにいる保育士の低い処遇は改善されぬままに……であります。保育者はよく知っていることかと思いますが、くやしいので少しだけあえて書くと、日本の保育士配置基準では、四・五歳児は保育士一人で見える子どもの数が三十人。これは、戦後すぐの一九四七年に制定された児童福祉法から変わっていません。ちなみに、フランスの三歳以上は十五人の子どもに保育士が一人配置されています。面積基準も二歳以上は日本一・九八㎡、フランス三歳以上五・五㎡。この基準の圧倒的な低さは、諸外国の人に驚か

れるだけでなく、日本に暮らす人でも、保育関係者でなければ知る機会はほとんどないのではないのでしょうか。

そして、保育士の平均賃金は二十四万四千五百円、全産業の平均賃金の三十三万八千円から十万円近い差があります（令和元年賃金構造基本統計調査）。これでは保育士確保もままならないと、「処遇改善策」と銘打った対策が講じられても、それが焼け石に水以上の効果あげたことはありません。

つながろうよ、みんなで

それでも私たちは、幸せに生きようと子どもたちとその保護者たちを励まし、決してマニュアルに収まらぬ子どもたちといっしょにつくる保育に喜びを見出しながら、あそびの楽しさを伝えあって保育をつむいできました。貧しい補助制度に歯を食いしばってがんばる小規模型やビルの中の保育所の職員たちも同様です。

「やりがい搾取」と指摘されて久しい保育労働ですが、私たちは搾取されるままに、ただただ笑っていたわけではありません。私たちはつながることで互いを励まし、より人間の信念のもと、声を上げてきました。ゆとりのあるあたたかな保育がすべての家庭に行き届く制度にしてほしい、現場でふんばる保育者の経験と判断が大切にされ、心身をこわすことなく長く働き続けられる処遇にしてほしい、そして、子どもの前で心から笑える基準に変えてほしい、と。

そんな私たちを試すかのように、パンデミックはグローバル経済の波に乗って、世界中を席卷したのです。保育は時代に求められて発展してきました。だとしたら、この二〇二〇年からはじまったパンデミックの世の中で、私たちは何を求められているのでしょうか？

先の見えない社会だからこそ、私たちの手で何をすべきかを、今落ち着いてみんなで考えようではありませんか。立ち止まってふり返って「大変だったよね」と励ましあいながら、それでも「だからどんな保育を私たちは今からやっていくの？」とみんなで語りあうきっかけに、この本がなればと思います。

二〇二一年十二月

平松知子